



# 医学部だより

第21号

2010.10.1

## 徳島県地域医療再生に向けた新たな展開

面積の小さい本県において、最も医療資源が集積している「東部I医療圏」（徳島大学を含む）には、県南部・県西部のへき地等を中心に、県全体の地域医療を支援することが切実に求められています。また、救急医療分野や高度医療分野においても医療ニーズに完全に対応できているとは言えず、県全体に必要な医師や看護師等を供給できるだけの医療従事者養成・確保機能も不十分であるなどの課題を抱えております。

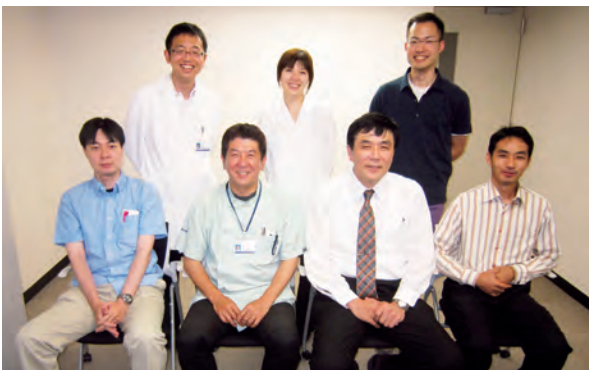
昨年度、国から地域医療再生基金として各県に約50億円が措置されました。この基金を基に徳島大学病院に、地域外科、地域産婦人科、ER・災害医療診療部の3診療部が、そして医学部には総合診療医学分野が設置されました。新しく歩み出した各分野をご紹介します。

### 総合診療医学分野 谷 憲 治

総合診療医学分野は、2010年4月徳島県の寄附講座として徳島大学大学院に開設され、2007年10月より前身である地域医療学分野が取り組んできた研究活動をさらに発展させるべく、地域医療レベルの向上と地域医療に貢献できる総合診療医育成に向けた研究に取り組んでおります。教室員は教授1名、講師1名、助教2名、事務員1名のスタッフに大学院生1名と後期研修医1名で、徳島県立海部病院の地域医療研究センターを研究拠点とし、自らが徳島県の地域医療に貢献しながら、医学生

から初期研修医、そして後期研修医への継続した総合診療医育成システムの構築に努めております。

徳島大学医学部の臨床実習クリニカル・クラークシップに平成20年度より新たに地域医療実習が導入され、医学科5年生から6年生にかけて、医学生全員が1週間の地域医療実習を体験しております。徳島県南の海部郡を実習拠点とし、地域医療に貢献する中規模あるいは小規模病院、一人医師の診療所や離島診療所、様々な介護施設、そして在宅（訪問診療）などで行われ、大学病院では経験する機会の少ない体験ができております。こういった地域医療実習によって、医学生たちが地域医療は将来の自分にとって決して無縁のものではないということを理解してもらうに留まらず、地域医療を身近で馴染もてる医療として感じてほしいと願っております。2007年10月に結成された学生サークル「医学部地域医療研究会」には2010年8月現在で90名の医学生が入会しており、当分野のスタッフが活動支援を行っております。彼らは様々な医療施設や介護施設の現場を視察することで、地域における医療・介護・福祉の仕組みへの理解を深めるとともに、将来の自分自身のキャリアデザインに役立てています。また、2009年度からの徳島県地域枠



総合診療医学分野教室員

### 目次

### CONTENTS

徳島地域医療再生に向けた新たな展開……………1	学生委員会から保護者の皆様へ……………7
知事と徳島大学医学部「地域枠」1年生との ランチ・ミーティング2010……………3	教務委員会から学生のみなさんへ……………7
オープンキャンパス……………4	表彰……………8
留学体験記……………5	学遊抄……………9
医学部長挨拶……………6	数字で見る医学部……………10
徳島医学会報告……………6	新任教職員あいさつ……………11
	転出者ごあいさつ……………12

推薦入学生に対する教育も担当しており、地域医療実習や研究会の開催、知事とのミーティングなどの企画を行っております。

このような学生教育や医師確保への取り組みが徳島県の地域医療における医師不足の現場に反映される時期はまだ先のことではあると思います。しかし、医学生や若い医師に対して地域医療や総合診療に触れる機会を与えることでその関心を高め、

若い力が地域医療を活性化し、最終的には徳島大学の卒業生の中から将来地域医療に情熱を燃やす医師が一人でも多く輩出されることを期待し、スタッフ一同全力で取り組んでいくつもりです。皆様方のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。活動の詳細は教室HPをご覧ください。

➔ <http://www.tiiki.umin.jp/>



徳島大学地域枠入学生地域医療体験実習 住民の前での発表会（県立海部病院 2010年1月7日～8日）



#### 徳島大学病院 地域外科診療部 栗田 信浩

地域医療における外科診療は、悪性腫瘍を中心とした待機的症例に加え、多くの救急疾患を対象とするため、極めて重要な分野ですが、学生の外科離れ、都市志向、ベテラン医師の退職などにより危機的状況に瀕しています。このような状況下で、若手の有能な外科医を確保することが一層困難となり、さらに状況が悪化するサイクルに陥っているのが現状です。

我々に与えられた仕事は、地域医療に対する直接的支援のみならず、地方病院に対して限られた人員でより効果的な診療支援を行い、若手医師が魅力を感じることが出来る研修体制を確立することにあります。

地域外科診療部は、消化器外科 2名、胸部外科 1名の計3名の医師で構成され、特に消化器外科・胸部外科各1名は、ほぼ常勤の形態で県立三好病院に派遣されています。地域外科診療部では、地域外科医療を再生するため以下の取り組みを進めています。

##### 1. 安心できる地域医療の提供

消化管・呼吸器疾患は、へき地でも症例の多くを占め、救急疾患を含めて手術、特に高齢者への負担の軽い内視鏡手術などの低侵襲手術を積極的に行なうことで、手術の質・量を

高めるよう支援を行います。

##### 2. 医師の確保・養成

内視鏡手術などの高度医療を積極的に行い、初期・後期研修医の獲得に努めます。さらに、内視鏡手術を安全に行う上で重要な術式の標準化、手術チームの技術向上、術前の精密な解剖の把握、肥満など手術リスク評価など多岐にわたる研究が必要であり、大学院教育に参加し、安定的に研究が持続できる体制を整えつつあります。

また、外科への興味を促す目的で、地元の中高生を対象にキッズセミナーなどの企画を推進しています。

##### 3. 研究（手術支援・特に遠隔医療）の推進

徳島大学と県立3病院間のインターネット回線網を確立し、遠隔医療システム構築を進めています。特に内視鏡手術は術野映像が全てモニタに描出され、インターネット回線を用いた遠隔医療に適しています。これらの低侵襲で先端的な医療技術を基盤として、双方向通信可能な恒久的な遠隔医療システムを構築することは、最も重要な研究課題です。このシステムは手術映像だけでなく、画像診断やリハビリテーションなどにも適応を拡大することで、少ない医師、低コストで効果的な医療支援を行うことが可能となります。



#### 徳島大学病院 地域産婦人科診療部 古本 博孝

産婦人科医師の不足によって、分娩を取り扱う施設が急激に減少しており、地方では住んでいる地域で分娩できない分娩難民が発生し社会問題となっている。

妊娠・分娩は急変する可能性があり、その場合複数の産婦人科医師と新生児を診る医師が必要であるこ

とから、病院の集約化が進んでおり、状況の悪化に拍車がかかっている。徳島県南部においても阿南市以南には産婦人科が無く、またがん拠点病院や不妊クリニック、周産期センターは徳島市に集中しており、診療格差が大きく住民にとっては非常に困った事態となっている。地域産婦人科は徳島県の委託を受けて、このような状況を何とかするための社会実験を行なう講



座である。

現在、教授1名、助教2名の3人体制で、大学の産婦人科教室と協力しながら県立海部病院で産婦人科の診療を行なっている。海部病院は17名いた医師が7名まで減少し、危機的な状況になっていたが、肺がんが専門の坂東院長が着任し、医師も増えつつあり、活気がでてきている。院長は海部病院を県南のがんの拠点病院にしたい考えをもっており、私も婦人科腫瘍が専門なので微力ながら協力したいと考えている。大学で診ていた県南の患者さんを海部病院でみており、化学療法も行っている。リスクの少ない手術は海部病院で行なってもよいと思うが、リスクの高いものは大学で行なう予定である。大きな病院とうまく診療連携しながら、できることはここでいい、患者さんに便利で質の高い医療を提供したいと思う。分娩も取り扱っているが、常駐する産婦人科医師が1名しかおらず、小児科医もないため、少しでも異常がある場合は阿南市や小松島市に搬送するしかなく、難しいところである。妊娠中の検診はここでいい、分娩は大きい病院で行なうセミオープンシステムも採用しているが、こちらが主体になるかもしれない。

今後の課題としては 1) 近くの産婦人科病院と如何に連携していくか。2) 専門医でなくても高い診療レベルを維持するために大病院の専門医と如何に連携していくか。3) 看護師や



徳島県立海部病院

助産師の研修システムの構築 4) 緩和治療について在宅や診療所緩和ネットワークの構築 5) がん登録システムの構築 6) がん検診、がん治療、不妊症、更年期、妊娠・出産などについて住民向けの講演や患者教室を行ない、行政や住民の意識改革をはかり、住民のニーズを明らかにする。7) 医学生や研修医の地域医療に関する教育、等が考えられるが、地方の病院が少ない医師数で大きな病院と連携しながらうまくやっっていく方法を模索したいと考えている。



徳島大学病院 ER・災害医療診療部 今中 秀光

2010年4月に徳島大学病院 ER・災害医療診療部が開設されました。徳島県の地域医療再生のために開設された寄附講座の一つで、私と高津医師の二人が着任しました。

私は、昭和61年に集中治療部に配属になった後は集中治療の魅力に取り付かれ今日に至っております。集中治療でも救急・災害医療でも、重症患者の病態は時々刻々変化していきます。呼吸管理と循環管理を始めとする全身管理は難しく、その分やりがいがある分野だと思います。

地域救急医療の危機、崩壊が叫ばれていますが、特効薬はありません。遅いようでも学生時代からの人作りを地道に続けるしかないと考えています。診療を通じて、医学生、研修医に対し、救急・災害医療、集中治療の面白さ、重要性を伝えていく

つもりです。いつの時代にも通用する教育原理は「後輩の目標となる先輩」であり、「ベッドサイド教育」です。中央診療部門として、様々な診療科から評価され、誇りのもてる救急医、集中治療医を育成することを目指します。

救急・集中治療の役割は近年ますます大きくなっています。主に院内の重症患者をじっくり管理していく集中治療室(ICU)、院外から突然飛び込んでくる重症患者を手際よく診断治療していくER、この2本柱の研修を実践すれば素晴らしい医師になることは間違いありません。手始めとして、私が週1回徳島県立中央病院 ER・ICUで、高津医師が週2回ER当直勤務をしています。今後とも徳島大学の救急集中治療医学講座と、徳島県立中央病院のER・ICUがより連携を深め、徳島県の救急・災害医療、集中治療のレベルアップに貢献していきたいと思っています。

知事と徳島大学医学部「地域枠」1年生とのランチ・ミーティング2010

平成22年6月21日、飯泉嘉門徳島県知事と地域枠入学の医学科1年生17名とのランチタイムミーティングが、常三島キャンパスで開催されました。玉置医学部長の挨拶と谷教授からの学生紹介の後、医学生と知事との意見交換が行われました。地域枠の学生達は、自分の目指す医師像や地域医療への思いについて話した後、飯泉知事に対して「地域医療を良くするための県の医療政策」「地域医療に望まれる医師像」等について質問や意見を出しました。ミーティング後、医学生達は「地域枠入学に関して不安な気持ちも持っていたが、今回知事と地域医療について様々な意見交換ができたことで、将来地域医療に貢献したい気持ちがさらに高まった」と話していました。(谷 憲治)



オ

ー

プ

ン

Open Campus

キ

ャ

ン

パ

ス

## 栄養学

8月5日午前には栄養学科のオープンキャンパスを開催いたしました。大塚講堂にて、入試委員の中屋から大学の紹介、平成23年度入学者選抜の概要、入学者状況、栄養学科卒業生の就職状況を説明しました。ミニ講義「リンの栄養学」(宮本賢一 分子栄養学分野)、「歴史から学ぶ栄養学」(中屋豊 代謝栄養学分野)が行われました。研究棟の見学では、各部屋に案内係を付け、受験生に説明したり、受験生からの質問を受けていました。同時に2つの教室の学部学生の卒業研究の中間発表会を開き、どのような研究をしているかを紹介しました。当日は、徳島県を中心に北海道から九州、沖縄まで、約200名の受験生、保護者および教員に参加いただきました。最後にオープンキャンパスに関する、各種アンケートに答えていただきました。開催については、本学ホームページ、高等学校教員、高等学校内のポスターおよび家族からの情報が多く、本学ホームページが充実した成果が出ているように思います。ミニ講義では、栄養に興味をもてた、あるいは栄養学の深さがわかったなどの意見がありました。また、研究施設の充

実ぶりにも関心があったようです。「考えていた以上にすごところでした」というようなコメントもありました。今年、教室説明用のポスターの充実、案内係を置こななどの新しい試みを行いました。受験生にとっては、大きな講堂では発言しにくいようでしたが、案内係の大学院生などには気軽に質問ができたようです。オープンキャンパス後の栄養学科の印象としては、従来の「調理や給食」などを中心とした栄養学ではなく、「医学教育」を基盤にした栄養学の実践の場であるとの意見が多く聞かれました。今後も、もっと県外の高校に宣伝し、多くの受験生が訪れてくれるようにしたいと考えています。

(中屋 豊)



## 保健学

8月5日午後から大塚講堂において、保健学科オープンキャンパスを開催いたしました。参加者は例年増加しており、本年度も昨年に比べて60人多い、463人の方の参加がありました。保健学科長のあいさつ、入学試験の概要説明の後、看護学専攻・放射線技術科学専攻・検査技術科学専攻の各主任から、専攻の紹介が行われました。各専攻における大学での学習内容や将来の就職先等の説明が具体的にあり、参加した高校生の方々に各専攻の概要を理解してもらったのではないかと思います。その後は、参加者の方々が希望する専攻に分かれて、専攻ごとに施設見学と相談会を開催いたしました。昨年度は、校舎の改修工事のため、施設見学ができません

でしたが、本年度は新しくなった実習室や教室を見学してもらうことができました。暑い中でしたが、皆さん熱心に施設を見学し、相談会でも活発な質疑応答が行われました。相談会での質問は、入学試験から入学後の大学生活、就職先と幅広く、参加者の方々の本学科への関心の高さが窺えました。さらに、本年度は社会人入学や編入学を希望する方も参加して下さり、オープンキャンパスの役割も広がっていると感じました。今後の課題として、参加者の方々が年々増えているために、施設もゆっくり見てもらう時間がとれなかったり、十分な対応ができにくい現状が出てきていることがあげられます。多くの方が参加して下さっても、十分満足してもらえるような方法を検討する必要があると考えています。

(關戸啓子)

## 医学

8月6日、大塚講堂において医学科オープンキャンパスが開催された。猛暑にも拘わらず、昨年と同様、高校生を中心に300名近い参加があった。当日は、前澤医学部長補佐の挨拶および西村による医学科紹介に引き続き、基礎、臨床それぞれミニ講義が行われた。基礎医学からはストレス制御医学分野・六反教授が、ストレスと関連遺伝子について講義され、また、臨床医学からは、胸部・内分泌・腫瘍外科学分野・丹黒教授が、乳腺および食道の悪性腫瘍の外科的治療について、ビデオも交え講義された。参加した高校生からは、「ストレスと遺伝子の関係に驚いた」「この先生に教わりたい」などの感想があり、好評であった。続いて5班に分かれ、それぞれ顕微解剖学分野(石村教授)、機能解剖学分野(福井教授)、疾患酵素学研究センター(木戸教授)、疾患ゲノム研究センター(親泊教授、板倉教授)の研究室や、スキルスラボ(医学教育開発センター・赤池准教授)、チュートリアル室、コンピュータールームなどの見学を行った。これらの施設見学についても、「研究所を見ることができて、より興味を持った」「地方大学

にも最先端に行く先生方がいると分かった」などの感想が寄せられた。施設見学のように、教育・研究環境を実際に体感してもらうことや手術のビデオが効果的な印象である。午後に開催された県のスキルスラボを使った演習へ参加したかったとの意見もあり、今後は、スキルスラボなどで実際に体験してもらう企画も検討すべきかも知れない。

(西村明徳)





# テキサス大学★サマー・リサーチ・プログラム 体験記

医学科4年 赤池 瑤子

5月末から8週間、テキサス大学医学部のサマーリサーチプログラムに参加させて頂きました。このプログラムは、米国内の医学部1年生や医学部を目指す Collage 生、さらに中国、台湾の提携校からの学生を対象としており、学生はそれぞれ希望する研究室に配属され、研究の基礎を学びます。私は内分泌教室の Mary Ruppe 先生にお世話になり、rickets 発症に関与する遺伝子変異について研究しました。実験に加え、週1~2回病院見学に行き、実際に rickets 患者さんに会う機会もあり、基礎と臨床のつながりの大切さを実感しました。さらにこのプログラムにはラン



チセミナーやER見学が含まれており、医師・研究者・学生の活発な議論はとても新鮮でした。休日には、NASA

観光をはじめ様々なイベントがあり、大学外でも大変充実した日々を送ることができました。今回の留学にあたりお世話になりました、玉置俊晃医学部長、泉啓介教授、福井義浩教授、カルビ・ブカサ先生、村澤普惠医学部長補佐をはじめ諸先生方に深く御礼申し上げます。

医学科4年 中西 信人

ヒューストンでの生活2ヶ月。私の留学は自分が世界で通用するのかを深く考えさせ、今心の中には言葉では表せない大きくて深い感情があります。世界一の規模を誇るテキサスメディカルセンターは東京ドーム64個分の敷地に100個以上のビルが林立する巨大な医療施設です。私は神経内科で多発性硬化症の研究をしてきました。自己免疫疾患である多発性硬化症の標的とする抗原を同定するため、何度も抗原抗体反応を測定しました。諦めずに研究し続けた結果、いくつかの抗原で有意差を出すことが出来ました。一転して休日はよくホームパーティーに呼んで頂きアメリカ流オンオフの切り替え方を知りました。留学生活は甘いものではありませんでしたが、そのおかげもあり、私は大変充実した時間を過ごす



ことができました。このような貴重な経験をさせて頂きまして、玉置医学部長を始め多くの方にこの場を御借りして厚くお礼を申し上げます。

# ハノーバー医科大学★交換留学生プログラム 体験記

栄養生命科学教育部 博士後期課程3年 塩田 あすか

7月12日から4週間、ハノーバー医科大学 Dr. Schieffer のラボで交換留学生として基礎研究をさせて頂きました。私は動脈硬化をテーマに研究を行っており、彼らが所有しているノックアウトマウスを使用して、自分の研究テーマとリンクさせた実験を行うことを希望しました。留学前から研究内容について話し合い、想像以上の数の実験をさせて頂き、大変充実したものとなりました。知らない手法を教えて頂くことはもちろん、すでに知っている手法でも他所でのやり方を知る事は大変勉強になりました。また今後の共同研究に繋がる良いきっかけとなりました。しかし満足のいく結果を得るには4週間では短く、来年度からは他大学の生徒と同じように徳島からも2,3ヶ月に延長される事を願います。今回このような機会を与えてくださった中屋先生、



玉置先生をはじめプログラムに関わって下さった諸先生方、留学を許可しサポートして下さった武田先生、竹谷先生に深く感謝いたします。

医学科3年 谷本 和紀

私は、ハノーバー医科大学の Department of Cardiac, Thoracic, Transplant and Vascular Surgery で臨床実習をして来ました。日本では1心臓外科施設あたりの年間手術数が80例にも満たないため、外科医の技術向上・維持、救急時の医師不足などの問題が生じています。一方ドイツでは、1施設あたり心臓手術が年間1400例もある(MHHでは開胸手術のみで1700~1800例、血管手術も含めると3500例) 合理的な医療制度が完備されています。また、術前・術後管理やベッドの移動等は他の専門スタッフが行うので外科医は手術に集中でき、1日に数例の手術をこなします。そのような環境の中で、手術



supervisor の Frau Salmoukas と (病棟にて)

見学などをさせて頂けたことに感謝しております。今後この留学で得たものを活かし、社会により貢献できる医師になれるよう邁進していく所存です。留学に際しましては多くの方々、特に玉置医学部長、中屋教授、村澤医学部長補佐にお世話になりました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。



## 徳島大学医学部と地域医療再生

医学部長 玉置俊晃

日本全国で地域医療の崩壊が問題視されて久しいが、地域医療再生の方向性は、未だ見えてこない。政府も幾つかの具体的な方策を執り始めている。文部省は、地域枠定員として医学部入学定員を増加し始めた。徳島大学でも、平成21・22年度に入学定員を増加し、現在の入学定員は95名から112名に増加した。日本の全医学部入学定員は、平成19年の7625名から平成22年度は8846名に増加した。明らかに医師数は長期的には増加するが、医療崩壊に対する急性効果は無く慢性効果についても疑問が残る。一方、医師過剰に対する心配もある。現在、日本の人口10万人あたりの医師数は約220名であり、OECD加盟国の平均310名よりはかなり少ない。2010年度の入学定員を維持すると2032年頃には、医師数は310名を突破し2040年には338名に達すると推測されている。また、平成21年度に政府は地域医療再生基金として各県に約50億円を措置した。この基金を基に徳島大学病院に、地域外科、地域産婦人科、ER・

災害医療診療部の3診療部が、医学部に総合診療医学分野が設置され12名の特任教員が配置された。特任教員は、徳島大学での活動のみならず3つの徳島県立病院の臨床活動に参加する。

地域医療を充実させる方策は幾つか考えられるが、個人的には、医学部教員数を見直し、地方医学部の人材育成機能と医師派遣機能を充実させる事が最も有効であると考えている。従来の医局制度による医師派遣機能は、幾つかの問題を抱えていたが、地域医療を効率的に機能させるためには大きな役割を担ってきたと信じている。各地域の実情にあった地域医療を効率的・機能的に展開するためには、医育機関が医師の生涯教育も配慮した人材派遣システムを構築する必要があると考える。当然、そのシステムは透明性を持ち十分な説明責任をはたす必要がある事は言うまでもない。一度壊れた医学部を中心にした人材派遣システムを再構築していくことは容易なことではないが、地域社会の理解を得て新しいシステムを早急に模索する必要があると感じている。

## 徳島医学会報告

### ■ 第241回徳島医学会学術集会（平成22年度夏期）

ストレス制御医学分野 教授 六反一仁

例年のない厳しい猛暑の中、8月1日（日）、第241回徳島医学会学術集会が開催されました。今回は、臨床神経科学分野（梶龍児教授）とストレス制御医学分野（六反）が担当し、従来行っていた懇親会を中止し、若手奨励賞受賞者を1名から2名に増やし、初めて徳島県医師会館を会場として行いました。38題もの一般演題の申し込みがあり、大学関係者100名、医師会関係者100名に加え、公開講座に市民100名の参加があり、総勢300名が学術集会を楽しみました。

午前中のシンポジウムは、「職場のメンタルヘルスの新しい視点—ストレス社会を生き抜く」と題し、産業医の単位認定セミナーを兼ね、桑野由紀先生（ストレス制御医学分野）から新しいストレス評価法、寺尾純二教授（食品機能学分野）から抗ストレス食品のお話があり、産業医科大学の堤明純教授から、職場ストレスのコホート研究の成果と職場ストレスの一次予防対策についての興味深いお話がありました。続いて、循環器内



科学分野佐田政隆教授から「冠動脈疾患の病態解明と新しい診断治療技術の開発」と題した教授就任講演がありました。新しく独立した循環器内科学の研究と診療に対する熱い思いが伝わってくるご講演に、一同深い感銘とともに徳島大学の循環器診療への大きな期待を抱きました。

昼食を挟んでポスター発表があり、様々な現場でご活躍の先生方間で熱心な討論が繰り広げられました。ポスター発表の後、第24回徳島医学会を受賞された心臓血管外科分野の元木達夫先生から「ピオグリタゾン投与による腹部大動脈瘤における抗動脈硬化作用」、田岡病院救急科の上山裕二先生から「ER救急型」を行う事で地域のニーズに応える」と題した授賞記念講演をそれぞれ拝聴しました。午後は、市民公開シンポジウム「ここまで治る脳卒中と認知症」が行われ、補助椅子でやっと収容できるほどの盛況ぶりでした。徳島大学病院の寺澤由佳先生がわかりやすく脳卒中のお話をされ、国立精神・神経センター病院神経内科の坂本崇先生からボツリヌス毒素を用いた新しい脳卒中後遺症の治療、徳島大学病院神経内科中村和己先生から嚥下障害とのつきあい方、同じく神経内科の和泉唯信先生から認知症を予防するためにはどうしたらよいか、のご講演がありました。高齢化が進む中で益々深刻な問題となっているテーマであり、一般市民の方々の切実な要望を捉えたすばらしいシンポジウムでした。

このように、暑さと会場の熱気の中で、第241回徳島医学会学術集会も無事成功裡に終了したことを報告いたします。最後になりましたが、ご協力頂いた多くの皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げます。



## ● 学生委員会から保護者の皆様へ ●

医学部学生委員会委員長 石村和敬

今回は学部学生の修学状況についてお知らせします。

平成22年5月1日時点での医学部の在学学生は総数1322名で、内訳は医学科605名、栄養学科205名、保健学科512名（看護学専攻286名、放射線技術科学専攻153名、検査技術科学専攻73名）です。この中に留年経験者が何人いるかと申しますと、医学科41名、栄養学科7名、保健学科28名（看護学14名、放射線技術12名、検査技術2名）となっていて、留年経験者が多いのは保健学科の放射線技術科学専攻と医学科ということがわかります。留年にいたる理由は、成績不振、出席日数不足、進路変更目的での休学などいろいろです。参考までに過去3年間の退学者数、休学者数をあげてみます。平成21年度退学者5名（医学科3名、栄養学科1名、保健学科1名）、休学者23名（医学科12名、栄養学科4名、保健学科7名）、平成20年度退学者9名（医学科2名、保健学科7名）、休学者15名（医学科3名、保健学科12名）、

平成19年度退学者6名（医学科2名、栄養学科2名、保健学科2名）、休学者18名（医学科2名、栄養学科8名、保健学科8名）。医学科の退学者7名のうち4名はMD、Ph.D.コースに進学した人達で何も問題はありません。問題は他の3名で精神的な問題で長期間休学し、最終的に退学にいたりました。栄養学科や保健学科の退学者や休学者はほとんどが進路変更であり問題がないように見えるのに対して、医学科では休学者の中にも神経科的な疾患による人が割合多く、気がかりです。教務委員会の先生や事務の方々とも協力してできるだけサポートするようにしていますが、十分に力が及ばない場合には残念な結果となります。保護者の皆様には、是非日頃からお子さん達の生活状況や精神状態を把握していただき、明るく充実した学生生活を全うできるようにご助言いただけますようお願い申し上げます。

## ● 教務委員会から学生のみなさんへ ●

医学部教務委員会委員長 福井義浩

皆さんの講義、実習、成績等の学業の遂行に関することは、学務課の第一教務係（医学科・栄養学科担当：岩森係長、松尾主任、高石係員）と第四教務係（保健学科担当：多田係長、三好主任）が担当しています。医学科に関しては委員長の福井が、栄養学科に関しては高橋教授が、保健学科に関しては吉永教授が責任者として皆さんの学業に関することをサポートしています。

さらに、医学部教育支援センター（センター長：福井義浩、副センター長：赤池先生・三笠先生、岩木係員、古住係員）は主として医学科のPBLチュートリアルや研究室配属を担当しています。

医学科では、教務委員長、教育支援センター副センター長等と医学科各学年総代との懇談会を2-3ヶ月に1回開催しています。気のついたことは何でも総代を介して、又は直接伝えて下さい。この場で出た意見や要望は、担当の係、場合によっては学部長、大学事務局に迅速に伝えて問題を解決しています。講義日程表のこと、グラウンドのこと、ロッカーのこと、自習室のこと等がこの場で出た要望として解決されました。

出席回数が極端に少ない、あるいは成績が極端に悪い（下位10%程度）、あるいは問題行動がある学生には、年間数回、個別面談を複数の教務委員、学生委員の教員が行っていますが、同じ学生を何度も面談することがあります。もし、呼び出された際は、その内容をよく理解して修正するように努力して下さい。現在、留年者には保護者宛に連絡を差し上げていますが、今後は成績を保護者に通知する方向で検討しています。

最近、気になっていることがいくつかありますので、以下に述べます。

- 1) 学生証の貸し借りや代筆による出席に関する不正
- 2) 問題行動（カンニング、不正アクセス等）の際、自分の非をなかなか認めない
- 3) 問題を起こしたり、単位を取れなかった際に保護者が過剰に介入する

皆さんは将来医療従事者になるわけですから、自分の非、間違いは素直に認めましょう。そうすることが自分の評価を下げない。他の人からの信頼を得ることだということを肝に銘じて下さい。

### 医学部行事予定 (平成22年10月～平成23年3月)



10月1日(金)	後期授業開始		
10月13日(水)	解剖休憩霊祭		
10月30日(土)～11月1日(月)	大学祭	23年	
11月2日(火)	徳島大学開学記念日	1月上旬	第25回管理栄養士国家試験願書受付 (1月中旬まで)
11月15日(月)	第105回医師国家試験願書受付 (12月3日(金)まで)		試験日：3月下旬
	試験日：2月12日(土)～14日(月)	15日(土)	大学入試センター試験 (16日(日)まで)
11月27日(土)	第94回助産師国家試験願書受付 (12月17日(金)まで)	2月25日(金)～2月26日(土)	入学試験 (前期日程)
	試験日：2月17日(木)	3月12日(土)	入学試験 (後期日程)
	第97回保健師国家試験願書受付 (12月17日(金)まで)	3月23日(水)	卒業式・大学院修了式
	試験日：2月18日(金)	3月25日(金)～3月31日(木)	学年末休業
	第100回看護師国家試験願書受付 (12月17日(金)まで)	25日(金)	助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表
12月21日(火)	第63回診療放射線技師国家試験願書受付 (1月11日(火)まで)	18日(金)	医師国家試験合格発表
	試験日：2月24日(木)		*診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験の合格発表は、3月31日(木)
	第57回臨床検査技師国家試験願書受付 (1月11日(火)まで)		管理栄養士国家試験の合格発表は、5月上旬
	試験日：2月23日(水)		
12月25日(土)	冬季休業 (1月7日(金)まで)		

平成21年度

## 研究室配属のポスター発表、優秀者の発表会及び授賞式

平成21年度の研究室配属ポスター発表は例年の第1総合実習室に加えて、臨床研究棟にある第5会議室も使って行われた。ポスター発表の評価(研究内容や発表態度など)を8演題ごとに2人の審査員(主に教授)をお願いして3月10日に実施した。評価者の個人差が採点に出てしまったのは致し方ないことであるが反省点ではある。そしてポスター発表優秀者の発表会及び授賞式が3月15日に臨床第2講堂で行われた。研究室配属の期間が1年間になって2年目であるが、配属期間が長くなった分、しっかり研究に取り組んだ成果が現れた発表が多かった。特に基礎医学分野及び各研究センターに所属した学生の発表には斬新な研究が多く見受けられた。20代前半に新しい研究手法を違和感なく取り入れ、新鮮な気持ちで研究に取り組んだ経験は貴重であり、5年後、10年後に何らかの形で成果が現れることを予感させる発表会であったと思う。

理系の他の学部と違って医学科の各分野には卒論生が少ない、大学院生が少ないという状況があるのでどの分野も指導教員の苦勞は計り知れないと思う。基礎であろうと臨床であろうと学生を受け入れるかどうかは各分野に任されている。学生の力をうまく引き出すべく努力して欲しいし、学部学生が常に研究室にいるという状況をうまく利用して研究を進めてもらいたいと思っている。

(教務委員：環境病理学分野 泉啓介)



### ◆◆◆ 受賞者紹介 ◆◆◆

#### 平成21年度医学部優秀学生賞

保健学科4年：早崎 浩史  
 保健学科クリーン対策委員：小村 悠太 (他25名)  
 大学祭模擬病院部：木村 有里 (他29名)  
 バトミントン部：金瀧 温美, 長田佳央梨  
 ※各種活動において顕著な功績があった学生または団体を表彰する賞です。医学科は前号に掲載済み

#### 国際ワークショップ学生論文賞

NCSP'10 Student Paper Award

受賞者名・所属：上田 知佳  
 保健学科放射線技術科学専攻4年生(受賞当時)  
 受賞年月日：平成22年3月5日  
 受賞論文：Iterative method based on a discretization of continuous-time image reconstruction for computed tomography

■■■ 第241回徳島医学会学術集会において、第25回徳島医学会賞および第4回若手奨励賞の受賞者が選考されました。■■■

#### 徳島医学会賞

大学：黒川 憲氏 (HBS研究部ストレス制御医学分野)  
 <選択的スプライシング調節因子 SFRS3 を介した新たなストレス応答機構の解明>  
 医師会：本田 壮一氏 (由岐病院)  
 <脳卒中の医療連携 一県南部医療の改善をめざして>

#### 若手奨励賞

門田 宗之氏 (徳島大学病院卒後臨床研修センター)  
 <繰り返す心不全と維持透析導入から離脱しえた腎動脈狭窄症の一例>  
 田村 潮氏 (徳島大学病院卒後臨床研修センター)  
 <胃癌化学療法における消化管毒性と血清 Diamine Oxidase (DAO) 活性に関する検討>



## 第62回西日本 医科学学生総合 体育大会

### 柔道

女子個人戦 優勝  
加嶋 洋子  
(医学科 3年)



## 第13回西日本 コメディカル 学生剣道大会

男子団体戦 優勝  
三宅 悠太 (保健学科 3年)  
他 2名  
女子個人戦 優勝  
中川 知香 (保健学科 2年)



## 平成22年度 6年生OSCE成績優秀者



最優秀賞 岡田 早未

優秀賞 新居 卓朗、長坂 信司、清水 美佳、三宅 毅志、高木 恵理、  
岡村 昌彦、春藤 真紀、立花 綾香、橋本 典子

部門賞(評点評価部門) 村田 昌彦

部門賞(概略評価部門) 児玉 善之、猪子 未希、古谷 友香、長谷川知早



平成22年7月3日、臨床実習クリニカルクラークシップの総仕上げとして、6年次を対象とした Advanced OSCE を実施しました。成績が特に優秀であった学生には、玉置医科学教育部長より表彰状が授与されました。このような臨床技能試験を通して、臨床能力の向上が期待されます。

## 学遊抄 友に感謝

子どもの保健・看護学分野 二宮 恒夫

大学1年の時、前期試験が近かったが気力は全くわかない。大学合格の時の喜びはどこに行ったのかと思うくらい落ち込んでいた。大学をやめようと思っていた。親を悩ませていた。たまたまクラブの友人と棟は違って同じアパートだった。ある夜、一緒に勉強しようと言って入って来た。憂鬱な気分であったから話しもはずまない。机は一つしかないから、友人は寝そべて勉強をしている。私も気乗りはしないが、本や帳面を開いた。憂鬱な人間を相手にするのは嫌な思いであっただろうが、そのようなことは表情にも出さずに自分のペースで勉強をしている。毎日続いた。内心ひとりにしてほしいと思ったが、一緒にいるということに次第に慣れていった。その時間は大学をやめようとか、勉強をする気がわかないなどの悶々とした気分はどこかに置かざるを得なかった。友人がいるから仕方なく本を見ていなくてはならない時間になった。何とか前期試験を乗り切ることができた。その後は、日常の平凡な生活に戻ることができた。

言葉で私を励ますわけでもなく、何かきっかけを作って元気づけようとするわけでもなく、ただ側にいて救ってくれた。友人にしてみれば、自分の部屋で勉強したほうが能率も上がったであろう。この時の私の側にいるのは一苦勞であっただろう。私に比べれば、友人は大きな人間であった。

「しんゆう」を漢字で書けば、親友、心友、信友、真友の4つがあると、外来を受診していた子どもから教えられた。どれもすばらしい友人だと思った。どの漢字をあてた友が一体一番

信頼のおける友だちの表現なのかと尋ねると、つきあいの上で、友人を単にランク付けしているだけです、心から信頼している友人なんていないと。現在の子どもの世界が複雑になっていることを感じた。

この年になって思い起こせば、その時々心を手助けてくれた人がいた。自分が困った時、悩んでいる時、そんな時にこそ相手の本質に出会えるのかもしれない。知識を学ぶというより、生き方を学ぶ、人が人を生かすことを学ぶことが、一生というひとりに与えられた時間かもしれない。大学のこのときの友人はもうすでに逝ってしまった。信頼できる人間として心に残っている。本当に感謝している。人に接する時、この友が私に接してくれた時のことを思い出している。



第11回  
阿波宮野川マラソン大会  
1989年10月29日

# 数字で見る医学部

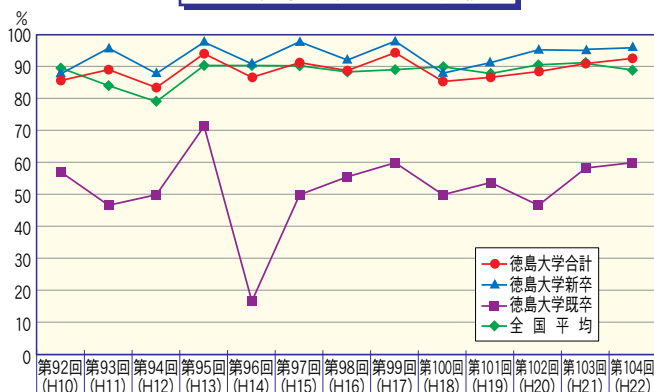
## ◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

平成 22 年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数調・入学者数調

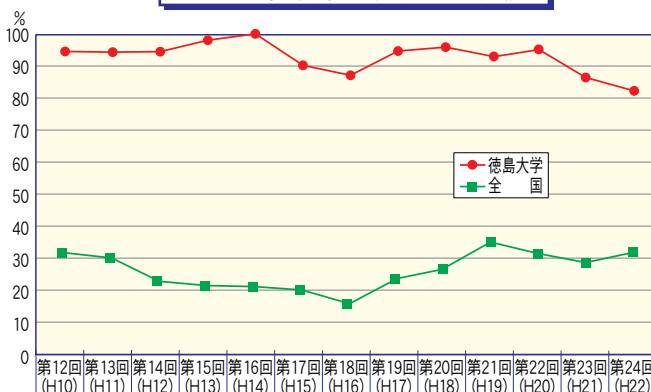
	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	海外	現役	一浪	その他
医 学 科	112	408	310	112	112	73	39	35	77	0	43	43	26
栄 養 学 科	50	138	87	55	50	8	42	17	33	0	42	5	3
保健学科	看護	70	330	227	73	73	4	37	36	0	58	11	4
	放射	37	134	85	39	37	31	11	26	0	25	11	1
	検査	17	69	63	19	17	6	6	11	0	12	4	1

## ◆ 国家試験

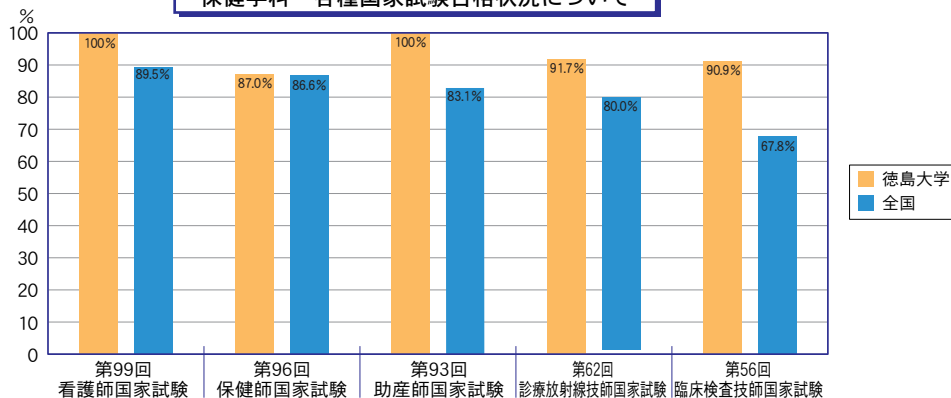
医師国家試験合格者の推移



管理栄養士国家試験合格者の推移



保健学科 各種国家試験合格状況について



## ◆ 科学研究費補助金採択状況（医学部・附属病院の合計）

(平成 22 年 8 月 1 日現在)

研究種目名	平成 18 年度		平成 19 年度		平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
特定領域研究	9	67,200	8	63,200	6	41,200	4	28,900	2	8,600
基盤研究 A	1	14,430	1	11,100	1	13,900	1	11,500	1	11,500
基盤研究 B	21	143,950	13	67,000	14	72,700	15	75,500	19	92,600
基盤研究 C	59	98,200	57	93,100	65	92,983	69	89,800	78	82,400
萌芽研究	10	16,400	5	8,600	4	6,100	0	0	0	0
挑戦的萌芽研究							5	6,300	11	18,200
若手研究 (S)					1	25,200	1	14,400	1	14,400
若手研究 (A)	2	14,690	3	19,100	3	13,800	4	19,900	4	19,100
若手研究 (B)	56	93,900	46	70,500	39	59,600	52	77,600	47	69,400
若手研究(スタートアップ)	1	1,300	3	3,600	7	10,510	5	5,980	1	950
新学術領域研究							1	25,000	2	28,200
特別研究促進費	1	2,200					0	0	0	0
特別研究員奨励費	4	3,800	4	3,600	1	600	5	3,400	5	3,500
合 計	164	456,070	140	339,800	141	336,593	162	358,280	171	348,850



## 新任教職員あいさつ



### 人類遺伝学分野 教授 井本 逸勢

平成22年5月1日より、ヘルスバイオサイエンス研究部人類遺伝学分野を担当させていただきます。私は、昭和62年に京都府立医科大学を卒業後、臨床医として消化器内科、糖尿病を専門に臨床・研究を行っていましたが、米国 Mayo Clinic 留学を機に分子生物学・分子遺伝学へと研究分野を変え、帰国後は東京医科歯科大学で主にヒトの癌と先天異常疾患のゲノム・エピゲノム解析による疾患関連遺伝子の同定に携わってきました。今後は、ヒト疾患の複雑な病態を理解し再構築することで予防、診断、治療につながるよう、これまで以上に体系的・定量的な遺伝子解析

研究と情報解析・システム医学生物学的解析をすすめていきたいと考えています。幸い徳島大学には、伝統に裏打ちされた高い志を持った生命科学者が集うとともに、優れた研究支援体制が整えられており、非常に心強く感じております。徳島大学の各分野の優秀な先生方と研究・教育の面で積極的に交流し、世界に発信できる研究を推進するとともに地域の健康にも貢献できる成果を挙げ、さらに一人でも多くの若い生命科学研究者を育てることを目標に努力していく所存です。このような欲張った目標が少しでも達成できますよう、今後とも、皆様にはご指導・ご鞭撻を賜りますよう、宜しく申し上げます。



### 眼科学分野 教授 三田村 佳典

平成22年4月1日付けで眼科学分野の6代目教授を拝命いたしました。徳島大学眼科はこれまで約66年に及ぶ歴史を有し、同窓会の会員数も200名を超える伝統ある教室です。今後、徳島大学眼科の更なる発展を遂げることができるよう、教職員一同、力を合わせて頑張っていきたいと思っております。

に対する多数の網膜硝子体手術を行うとともに、光線力学的療法や抗 VEGF 療法など最先端の治療法を積極的に取り入れ診療にあたってまいりました。今後もこれまでの経験を活かしながら緻密な臨床経験に裏打ちされた臨床研究、臨床に還元できる基礎研究を重視して網膜疾患の包括的な診療に取り組み、世界に誇れる網膜疾患の治療実績を築いてゆくとともに、眼科学の各分野で一流といわれる専門家を多数養成してゆきたいと考えております。皆様方にはこれからもご指導とご鞭撻を賜りますようどうかよろしく申し上げます。

私は北海道大学を卒業後、北海道大学・東邦大学・札幌医科大学・千葉大学といくつかの大学に在籍してまいりました。その間、網膜剥離や糖尿病網膜症などの網膜硝子体疾患の難治例



### 寄附講座 腫瘍内科学分野 特任教授 秋山 伸一

平成22年4月1日付けで、徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部寄附講座腫瘍内科学分野の特任教授として赴任致しました。昭和44年に九州大学を卒業して、すぐ内科の研修医になり大学病院で癌の入院患者さんを担当しましたが、激しい痛みの中で治療の効果もなく亡くなられました。現代医学の限界を思い知らされ、自分の能力も顧みず臨床研修修了後すぐにがん研究の道に進みました。それから、40年近くがんの治療法の研究に携わってきましたが、進行固形腫瘍はいまだ不治の病です。これまで、抗癌剤耐性の

機構と耐性克服、腫瘍血管新生の機構とその阻害剤の開発について研究を続けてきました。そのなかで、チミジンホスホリラーゼ (TP) というピリミジンヌクレオシドの代謝に関わる酵素が、血管新生因子の一つである血小板由来血管内皮細胞増殖因子 (PD-ECGF) と同一であることを見出し、TPによる血管新生の分子機構を解析しました。現在は、長年勤務した鹿児島大学・分子腫瘍学分野から徳島大学に移り、曽根教授、大鵬薬品工業徳島研究センターと緊密に協力して、新しい癌の治療法の研究・開発を行っています。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



### 医学・歯学・薬学部等事務部長 米原 壽男

徳島に着任して10日余り経った4月下旬、山登りを趣味としている私は、さっそく徳島市のシンボルである眉山に登りました。天気の良い日で、山上の展望台から市内を見下ろした後、登って来た道とは違う道をたどり下山を始めましたが、阿波おどり会館から徳島駅方面へ向かう道へ出る登山道が分からなくなり、中腹の舗装道路に出たところで左見右見していました。

しますよ」と暖かい言葉を掛けてくれました。隣の娘さんらしい人も、どうぞというように大きく頷いていました。思わぬ言葉にびっくりしたのですが、その日は登山が目的だったので丁重にお断りし、その場を後にしました。

丁度その時、中年のご婦人とその娘さんらしい二人連れを見つけ、これ幸いと道を尋ねたところ、登山道から徳島駅方面の道筋を丁寧に教えて下さり、それに加えて、私が駅へ急いでいるように見えたのか、「駅方面に行かれるのであれば、そちら方面へ戻りますので、良かったらここへ乗ってきた車でお送り

嬉しい気持ちに満たされて、山を下りました。いわゆるこれが四国八十八カ所巡りの「お接待の心」なのかと、さすが「発心の地・徳島」と、感じ入った次第です。私もこの「お接待の心」を見習いながら、学生、教職員の皆さんと接していきたいものだと思っております。

事務部長室のドアはいつでも開いておりますので、気軽にお立ち寄り下さい。また、グループ等で近郊の山に登る機会がありましたら、是非お誘い下さい。学生、教職員の皆さんと一緒に、ワイワイガヤガヤと賑やかに行けたら良いですね。

## 医学・歯学・薬学部等事務部学務課長 藤本 芳樹



本年4月より総務部企画・評価課課長補佐から、医学・歯学・薬学部等学務課長に就任いたしました。蔵本地区には、昭和58年10月に千葉大学から医学部学務係に転任し、昭和63年3月までの4年半勤務しておりました。このたび、22年振りに蔵本地区勤務となり、原点に立ち返った気持ち

しております。

平成22年度から国立大学法人も第2期に入り、何事も第1期と比較される状況となり、さらに業績向上、改革の推進等を求められることから、国立大学を取り巻く環境は一層厳しさが増すのではないかと予想されますが、学生の視点に立ったより良い教育及び学生支援に取り組みたいと考えております。教職員の皆様にご協力をいただき、職務を遂行したいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

## 新任准教授紹介

異動年月日	異動内容	氏名	所属
H 22. 4. 1	昇任	松崎 利也	産婦人科学
H 22. 4. 1	昇任	阪間 稔	放射線理工学
H 22. 6. 1	昇任	岩田 貴	医療教育開発センター
H 22. 7. 1	採用	松本 高広	動物資源研究部門
H 22. 7. 1	昇任	三笠 洋明	医学部教育支援センター
H 22. 7. 1	昇任	谷 洋江	子どもの保健・看護学

## 転出者ごあいさつ

## 徳島大学皮膚科を支えて下さった皆様へ

皮膚科学分野 教授 荒瀬 誠治



このたび10月1日付けで「健康保険鳴門病院院長」として転出することになりました。あっという間に起こったことで心の準備も未だできていませんが“私に与えられた役目”と決断いたしました。

思えば卒業前に、10年後の自分の姿を考えた時、「癌を専門にしている臨床医」が理想像として浮かび皮膚科を選びました。学生時代にふと手にとった近藤宗平先生（阪大放射線基礎医学教授）の「放射線生物学」を読んだことが引き金になりました。昭和49年卒業後すぐに皮膚科に入局し、昭和51年助手、55年講師、平成3年に教授を拝命しました。最短距離を走ったように見えますが、この間、徳島市民病院や高知県立中央病院で皮膚科医長も勤め、愛媛県中、国立普通寺、屋島病院等へは長期パート勤務し、最も多くの病院を経験した教授と言われました。また臨床の合間を縫って「DNA修復と紫外線発癌」の研究を、阪大放射線基礎医学（近藤宗平教授）、京大放射線生物研究センター（武部啓

教授）、ハイデルベルク大学マンハイム校（E. G. Jung 教授）で行ってきました。思えば激しく勉強した日々でした。一方、抜いた毛髪から細胞を培養し「毛包の生物学」とも格闘しました。卒後36年、臨床、研究、教育の中で多くの喜びと悲しみにあいましたが、皮膚科の選択を後悔したことは一度もありませんでした。定年まで2年半を残しての退職で、積み残しも多々あり、皆様に御迷惑をおかけすることは重々承知しておりますが、何とぞお許し願うと共に、今までの私を支えていただきましたことに感謝とお礼を申し上げます。

教授として最も気がかりな皮膚科教室の将来ですが、幸いにも久保准教授をはじめ強者達が頑張ってくれています。荒川先生が立ち上げ、武田先生が充実され、私が引き継がせていただいた教室も今や成熟し、次代に任せることは充分可能と考えての決断でしたが、その評価は将来になります。私は転出後も全てをかけて皮膚科教室を支援してゆきますが、皆様におかれましても今まで以上の御高配を何とぞ何とぞお願い申し上げます。



徳島大学は、学校教育法第69条の3第2項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準」を満たしていると認定されました。  
(平成19年3月28日)

- 認証評価機関  
独立行政法人大学評価・学位授与機構
- 認証期間 7年間  
(平成19年4月1日～平成26年3月31日)

## 編集後記



先日放映されていたテレビの特集「高齢者の自動車事故」によると、ある地域では65歳以上の高齢者が関与する交通事故が1/3以上を占めるとのことでした。運転免許証明書の自主返納制度もありますが、なかなか進まない背景には、都市部と異なり交通手段が発達していないため車を手放すと、病院や買物に行くことが困難になり、生活が著しく不便になるからだそうです。徳島県は、人口当たりの医師数は全国平均と比べ決して少なくはないのですが、医師の地域偏在の問題が指摘されてきました。特に新たな研修医制度の開始以来、地域医療の崩壊が叫ばれています。このような状況の中、国からの地域医療再生基金を基に、県全体の地域医療を支援する目的で、徳島大学病院と医学部に診療科および分野が増設されたので、「徳島県地域医療再生に向けた新たな展開」という特集記事を企画しました。(酒井)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会  
広報委員 酒井 徹(委員長)、泉 啓介、三田村佳典、森口博基、安友康二、田村綾子、米原壽男

本誌へのご意見・ご要望は、(第1総務係・大亀)E-mail: isysoumu1k@jim.tokushima-u.ac.jp まで  
お願いします。なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel: 088-633-9118 Fax: 088-633-9028 URL http://www.med.tokushima-u.ac.jp